

【作品タイトル】

ちくわ

【ペンネーム】

こるくる (藻)

世の中には、切っても切れない関係というものがある。
政治と経済、悪役と子ども、豆腐とおから、俺とちくわ。
俺たちはいつも一緒だった。

「付き合ってください！」

局地的な猛暑だった。今日は夏日のはずなのに俺だけが焼けるように暑かった。休みが始まって狂喜乱舞する学生たちがセミと大合唱している。今一番聴きたい声を拾おうと、目をつむり、彼女の声に集中する。日差しを背に受ける時間が永遠にも思えた。

「えっと、よろしくお願いします？」

衝撃。初めて磯辺揚げを見たときと同じくらいの衝撃だった。顔を上げる。俺が差し出したちくわの先端を彼女が握っている。

「やっ……やったあ——！！」

大声が大合唱に入りまじる。恋が実ったのだ。俺の想いを彼女は受け止めてくれたのだ。

ルルルが俺の彼女。夢のような出来事。俺はちくわの先端をつまんでみる。この感触は本物だ。つまり、目の前の、はにかんだ顔も本物……。

こいつはアツイ夏になりそうだ。

待ち合わせの時間になってもルルルが来ない。履歴を確認する。場所も時間も合っているみたいだ。遅れるのは構わないけど、時間が積み重なるたびに不安が押し寄せてくる。俺は一秒でも早く彼女の姿を確認したくて、ちくわの穴をのぞいた。

駅前こんなにも人で溢れかえっているのに、その全てがくすんで見える。サーチライトのように首を動かす。彼女は見つからない。約束の時間をもう一分四十秒も過ぎていた。虹色の一日にたちまち暗雲がたちこめる。連絡してみよう——としたところで、向こうから走ってくる人物を見つけた。ルルルだ。

「ごめんなさい、遅くなって」

甘白のワンピースに茶髪のロング。ちくわ色のユニゾンが目に眩しい。

「大丈夫。俺にはこいつがいるからな」

右手で握りあげたちくわは、日光にやられてぐったりしていた。背負ったバッグのホルスターにしまい、予備の一本を抜き出す。

「本当にちくわが好きなんだね」

「当たり前だろ。ルルルは？」

「私はそんなに」

俺たちは歩きます。こうして一緒にいるといつも心がウキウキする。でも少し、物足りない。初めは並んで歩くだけで新鮮だったのに。刺激に慣れてきたのかとしれない。

もしかしてルルルも……。

右手に握りしめたちくわを見る。今日は一步踏み出してみよう。

「あの一」

重なる声。不意に合う視線。ちよつと恥ずかしくて目をそらす。それでも羞恥を振り払って俺はちくわの穴に指をいれて差し出した。ルルルも、何も聞かず穴に指を入れた。同じ気持ちだつのかも知れない。

ルルルの手は小さい。このちくわでは、俺が中指を精一杯伸ばしても、爪先がちょこんと当たただけ。この距離感が有り難いような、残念なような。自分の気持ちがよく分からないほど今が幸せだった。

愛というものを誓うのは二度目だった。一度目は当然ちくわ。そして二度目は――。

司祭が俺たちの愛が本物かを問いかける。ここまで来て、やっぱり無理ですなんて奴はそう居ないだろう。もちろん俺の決意もかたかった。

「ちくわいます」

「誓います」

心からのちくわだった。

司祭から銀の指輪を受けとる。その穴に一回り小さいちくわを詰め込んだ。完璧だ。完璧なちくわのリング、略して竹輪。

「奏でよう、愛のプレリユード」

左手薬指に竹輪をはめると、ルルルは大輪の花を咲かせた。

今度は俺が受け取る番。同じように施したちくわが近づいてくる。味を楽しむようにゆつくりと。ちくわが近づくとつれて気分が高揚する。とうとう俺のちくわ指に収まってしまった。

交換を見届けた司祭は屈託のない笑みを浮かべる。あとは口づけを交わすだけ。

ベールを上げる。

「ち、ルルル……綺麗だ」

純白のウエディングドレスに身を包んだルルル。茶髪が編み込まれてアップになった姿は女神か、それともちくわか。ただひとつ残念なのは、頭を彩るサムシングブルーの花飾り。ちくわにはない色だ。

「ちくわ、好きか？」

「私はそんなに」

照れ隠しというやつだろう。もう六年の付き合いになる俺には分かる。

教会にG線上のエリアが鳴り渡る。優しく厳かな音色のなか、ルルルの肩を抱く。一步前に踏み出すと、式場は拍手で包まれた。

ちくわが産まれた。ちくわのように可ち愛い女の子だ。名前は三人から取って「みちる」と名付けた。はやく親わに顔を見せてちくわを食べたい。

育児というものは大ち変だった。普段の仕事に加え、ちくわの通じない赤ん坊相手に終ち日気を配り慣れないことをするというのは、想像以上になくちくわを必要とした。特に堪えたのは夜泣きとオムツの取り替えだが、後者は今では悪くないと思っている。薄い便と紙オムツの調和は、見事なちくわだったからだ。ああ、ちくわが食べたい、

ちくわが一人でちくわれるようになった。ちくわのちくわにこの歳で気がつくとは、流石俺の血くわを継ぐちくわだ。しかし、最近俺のちくわを食べたい。

ちくわが小学校に入学した。リコーダーって最早ちくわだよなとルルルに同意を求めると、「そうね」と言われた。ちくわ食べたい。

朝目が覚めると、いつも一緒にいるちくわが居なくなっていた。家のどこを探しても見当たらない。ルルルに聞いてみたが知らないらしい。ミチルが食べてしまったのではないかと俺は踏んでいる。ちくわ……。

ちくわ。

「行ってきます！」

「頑張ってね」

ユニフォームを着たルルルの娘が、奮励を起こす母の声を背に受け家を出る。以前より息巻いていたバスケの大会当日だった。

「んー！」

好きなおかずを弁当に詰めるため早起きしていたルルルが、ググツと伸びをした。

ようやく自分の時間になったルルルは、化粧台に向かい、出かける支度をする。天気は快晴。

絶光の外出日和だった。

「ねえあなた、たまには出かけない？」

答えは分かりきっていたが、それでもルルルは声をかける。

「ちくわ……」

寢室の片隅には廃人同然の夫が居た。ちくわが無くなって以来、心に穴が空いたように虚ろな様子を見せ、一日中その場を動こうとせず、ちくわの名を呼び続けていた。呼びつけた医者はやや呆れて「ちくわロス症候群」と診断した。

見るからに重篤だったため、カウンセラーの元に付き添ったり、別のちくわを与えたりして
みたが症状は一向に改善せず、とうとう夫は会社を辞めるところまで来てしまった。

「それじゃあ私ひとりで行ってくるからね」

看病するルルルにとって唯一幸いなのは、ちくわの幻影を見て夜中に徘徊したりしないため
外出ができることだ。月に何度かこうして気晴らしするのが数少ない楽しみになっていた。

『二人とも元気？ 今度そっち帰る予定だから』

『今度っていつ？』

『まだ分かんない。多分土日』

『決まったら教えてね』

アプリを閉じる。娘の帰省予告にもルルルは眉ひとつ動かさない。長い年月が過ぎ、身も心
もやつれ果てていた。正直、頃合いだと腹に据えていた。

「ねえ、あの子帰ってくるらしいよ」

「……………」

返事はない。

「どうして帰ってくると思う？」

「……………」

「見つけたのよ、ちくわを」

男が機敏にルルルを見上げる。ここ数年で一番の反応だった。

「待ち合わせしてるの。早くお父さんに見せたいんだってさ。迎えに行きましょう」

ルルルが腕を引いて立ち上がらせる。男は何の疑いもなく着のままで車に乗り込む。

家で無くなったちくわが、独り立ちした娘のもとで見つかるはずがない。至極単純な論理的
思考すら、とうの昔にできなくなっていた。ちくわが生きているという幻にすがり続けていた
男の末路だ。

星明りが照らす道をゆく。男は、駅とは真逆の山に向かっていることも気が付かず、ただル
ルルの運転するままに身を揺られていた。

ルルルは運転中、自分の半生を振り返っていた。私は何故この人と付き合ったのだろう、何
故結婚までしたのだろう、今まで看病し続けたのだろう。今さら言っても仕方がない人生の転
換点をつぶさに思い出していた。

「ついたわ」

荒地地を走行していた車が停まる。夫を降ろし、草木が生い茂る中に導く。

「あそこに居るの、もしかして」

何も木を指差して告げる。男はふらふらと、光にたかる羽虫のように歩く。数歩動いた
ところでその姿が消失した。

深い穴に落ちたのだ。

男は現状を理解すると、微かな笑みを浮かべた。穴の中には山のようにちくわがあった。

「その中にあのちくわがあるかも知れないね」

ルルルの手に錆びたシャベルが握られているにもかかわらず、男は一心不乱にちくわの山を漁り続けていた。

ルルルが男を見下げる。あまりに滑稽で、鼻で笑った。

「せめて大好きなちくわたちと一緒に眠らせてあげるわ」

ルルルが穴を埋めるあいだ、男はただただ、ちくわの山を掘り返していた。

◎ちくわは美味しいですね